

・・・LDによるカラヤンの名演をご覧ください・・・

《 曲 目 》

交響曲 第6番 ロ短調「悲愴」・・・チャイコフスキー作曲

*演奏・・・ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

*指揮・・・ヘルベルト・フォン・カラヤン

今から30数年前になりますがLDプレイヤーが市販され、そして23年前に現在使用中のプレイヤーを購入しオペラ、コンサートのほか美術館ものなどを鑑賞していました。レコードやCDによる音声のみの鑑賞から映像付きの音声を楽しむようになり、一部否定的な声もありましたが、ホールでの音楽鑑賞は演奏者を目で見ながら音楽を聴いていくことであり、特にオペラなどは音声だけでなく背景や歌手の身振りなどを併せて鑑賞する事が出来てこれがごく自然なことだと思い私は何ら抵抗を感じることなく受け入れる事が出来ました。

今日ご覧頂くLDにはA面に1973年にライブ演奏録画されたチャイコフスキーの交響曲第6番「悲愴」がB面にはピアノ協奏曲第1番が収められています。最近のデジタル映像ではないため画質はあまり良くありませんが、映像によるカラヤンの熱気あふれる指揮ぶりは最高です。

このLDプレイヤーは2000年に購入したもので、現在ではメーカーの補修も終了状況となっているため、今後のことを考え、プレイヤーで再生したものをパソコンに取込んでDVDデータ化したものです。

・・・以下にこのLDに対する歌崎氏の解説文をそのまま記載します・・・

ヘルベルト・フォン・カラヤンは1908年オーストリアのザルツブルクに生まれた。生地とウィーンで学び、ウルムやアーヘンで活躍し早くから注目を集めるとともに、1937年ウィーン国立歌劇場、38年にはベルリン国立歌劇場に招かれ、その成功によって「奇跡のカラヤン」と呼ばれた。そして、第二次世界大戦後はウィーン、ロンドン、ミラノなどで活躍し、1956年フルトヴェングラーの後任としてベルリン・フィルハーモニーの終身指揮者に就任。以後、ウィーン国立歌劇場などの音楽監督を兼任したことはあるが、一貫してベルリン・フィルハーモニーを指揮して名声を築き、67年からは自分の芸術的な理想を実現するためにザルツブルク復活祭音楽祭を主宰した。1989年5月、健康上の理由でベルリン・フィルハーモニーの地位を辞任し、わずか2か月余り後の7月16日に、惜しくもザルツブルクの自宅で急逝してしまった。享年81歳であった。

半世紀をこえるレコーディング歴を誇ったカラヤンは、主要な作品を繰り返し録音してきたが、中でも《悲愴交響曲》は、この巨匠が最も深い愛着を持っていた作品のひとつで、実に7回も録音している。

このビデオは、その5回目（71年）と6回目（76年）の録音の間に、彼らの本拠地ベルリン・フィルハーモニーでライブ収録されたもので、カラヤンの気力と体力が

充実し、ベルリン・フィルハーモニーとの関係も最も良い状態にあった時期の貴重な記録である。 それだけにその演奏は、ここに聴き、またみられるように、名演の誉れ高い二つの録音以上に素晴らしい内容をもっている。

カラヤンはスタジオでの収録になると、ともすると映像への意識が強くなりすぎることもあるが、その点このビデオは、実演ならではの熱い集中力が見事で、美しく大きなうねりを伴った演奏の力をストレートに伝えて、感銘が深い。

カラヤンならではの入念に磨き抜かれた表現には、常に強くしなやかな線がびんと張りつめているし、ベルリン・フィルハーモニーの名手たちの集中力と熱く鋭敏な反応も素晴らしい。美しい映像と効果的なカメラ・ワークがそうした演奏をととても美しくとらえており、あらゆる面でカラヤンの美学が徹底した《悲愴》の名演であり、これまでのカラヤンのビデオ・ソフトの中でも出色の遺産とあって良いだろう。

[[歌崎和彦]]

下の画像はディスクのジャケットの表示です。

